平成３０年１２月２６日（水）
愛知県健康福祉部医療福祉計画課
地域包括ケア・認知症対策室
研究開発支援グループ
担当　中村、伊藤
内線　３９６７・３９８１
ダイヤルイン　052-954-6494

国立長寿医療研究センター新棟の整備に係る支援について

今後、認知症高齢者の大幅な増加が見込まれ、認知症施策の推進は喫緊の課題となっていることから、愛知県では昨年９月に「あいちオレンジタウン構想」を策定し、地域づくりと研究開発の両面から取組を進めています。

「あいちオレンジタウン構想」において、県の認知症施策推進の中心的役割を担う国立長寿医療研究センター（以下「長寿研」という。）の老朽化・狭隘（あい）化した病棟の建替計画を、厚生労働省、長寿研、県の三者で検討してきたところ、平成 31 年度の政府予算案に新棟整備に対する補助が計上される見込みとなりました。

これを受けて、構想の具体化を加速し、本県の認知症施策を更に推進させるため、本県は長寿研の機能強化を図る新棟の整備に対し、国と協調して財政的支援を行っていきます。

＜整備計画の概要＞

○事業主体：国立研究開発法人　国立長寿医療研究センター
○施設規模（概要）：地上５階、延床面積約 12,534 ㎡
○病床規模：300 床
○主な臨床研究機能：ロコモフレイルセンター、感覚器センター、
メディカルゲノムセンター、最先端画像解析センター、
ロボットセンター・連携ラボ、もの忘れセンター
○整備スケジュール：2019 年度から 2021 年度まで
○整備費用（概算）：約 50 億円

国立長寿医療研究センター[オレンジホスピタル]の整備について

〇整備の目的

・　認知症の発症要因は、嗅覚の低下、聴覚障害（耳鼻咽喉科）、睡眠障害、糖尿病（代謝内科）、心不全（循環器内科）など複数の診療科に関係していることから、病棟を再編し、老化に伴う心身機能の低下に着目した横断的な臨床研究が行える施設・設備構成とすることにより、認知症になりやすい危険因子の原因解明や、早期発見、先進的な治療体制の構築を図る。

・　また、「あいちオレンジタウン構想」も踏まえ、入院中に自立を促し、在宅への移行につなげる機能の強化のため、もの忘れセンターと回復期リハビリテーション病棟の増床及び機能の充実を図る。

〇整備の概要

１　事業主体

国立研究開発法人　国立長寿医療研究センター

２　事業用地

位置：大府市森岡町７丁目430番地
（旧外来棟を撤去し整備）

敷地面積：約102,604㎡

３　施設規模（概要）

規模：地上５階

延床面積：約12,534㎡

４　病床規模：300床　[現在の稼働病床　301床]

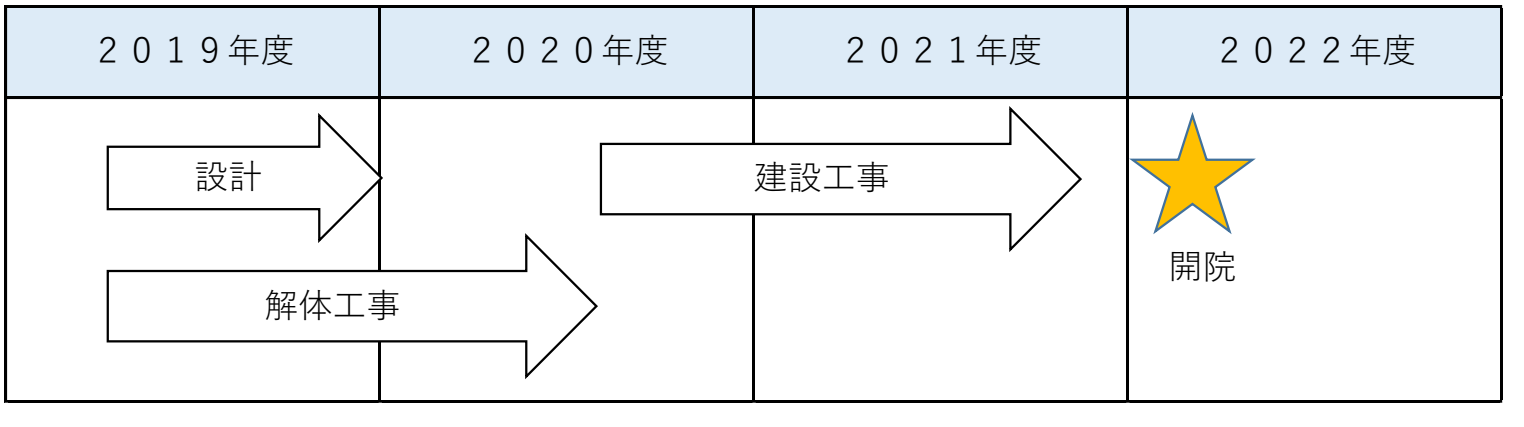
[新棟整備後]	外科系・フレイル病棟	内科系・フレイル病棟	感覚器・ロコモ病棟		回復期リハビリテーション病棟	地域包括ケア病棟	もの忘れセンター病棟
	50床	50床	50床		50床	50床	50床
[現在]	外科・内科混合病棟				回復期リハビリテーション病棟	地域包括ケア病棟	もの忘れセンター病棟
	48床	41床	46床	46床	45床	45床	30床

※フレイル：加齢とともに心身の活力が低下し、生活機能が障害され、心身の脆弱性が出現した状態。
一方で適切な介入・支援により生活機能の維持向上が可能な状態。
ロコモ：運動器（骨、筋肉、関節等）の障害によって移動機能（歩行、立ち座り等）の低下をきたした状態

５　主な臨床研究機能

・ロコモフレイルセンター	・運動器（骨、筋肉、関節等）の障害に係る診断、予防、治療法の開発
・感覚器センター	・感覚器（視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚）の障害を改善するための研究
・メディカルゲノムセンター	・高齢化に伴い発症する疾病に係る原因遺伝子の解析
・最先端画像解析センター	・最新の画像と血液検査を組合わせた新規画像解析法の開発
・ロボットセンター・連携ラボ	・軽度な認知機能の低下の段階から末期の認知症の段階までの全てをカバーするロボットや生活支援機器の開発 ・企業への開発相談、実証、安全検証の推進
・もの忘れセンター	・個人に最適な予防治療方法の確立

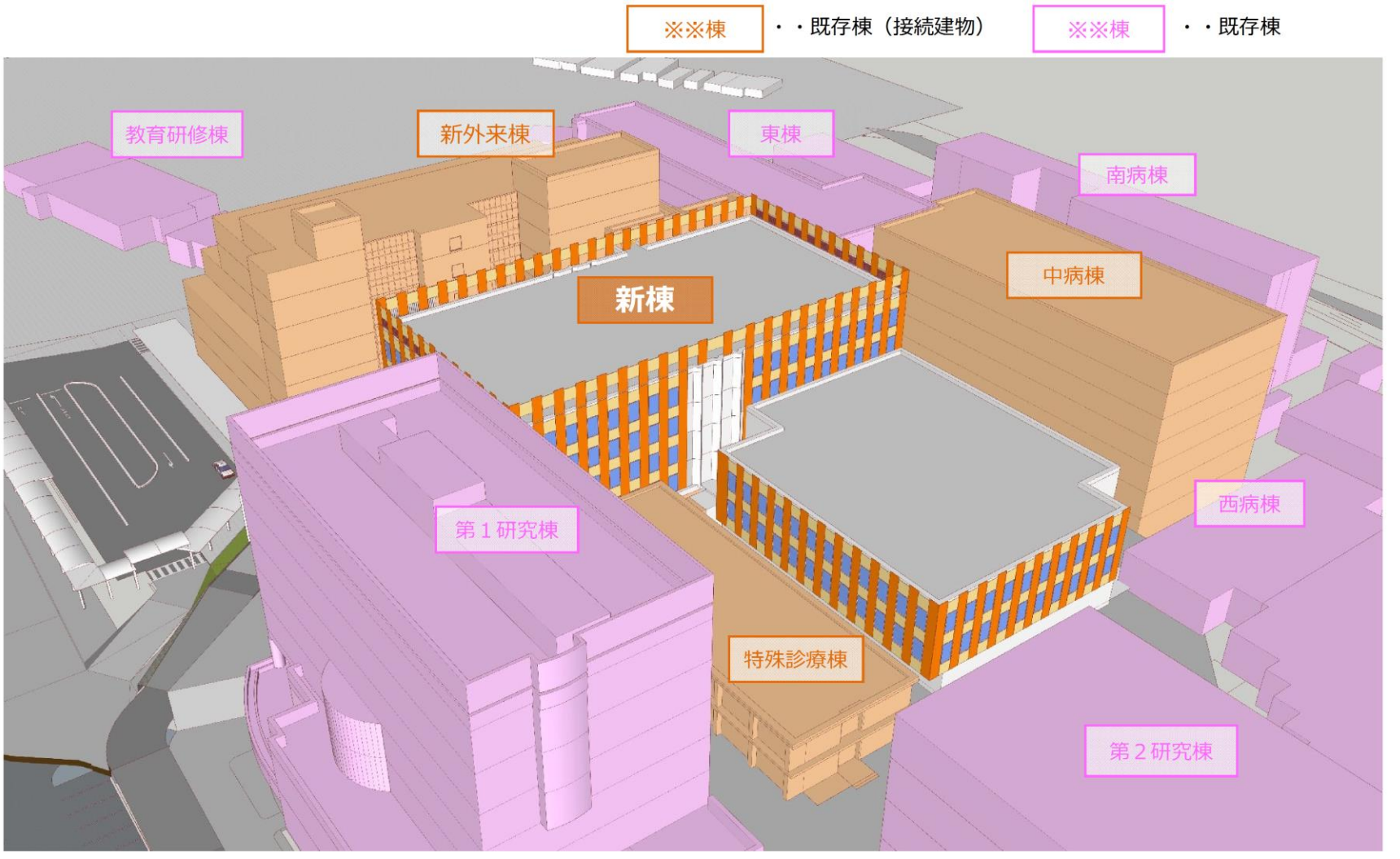
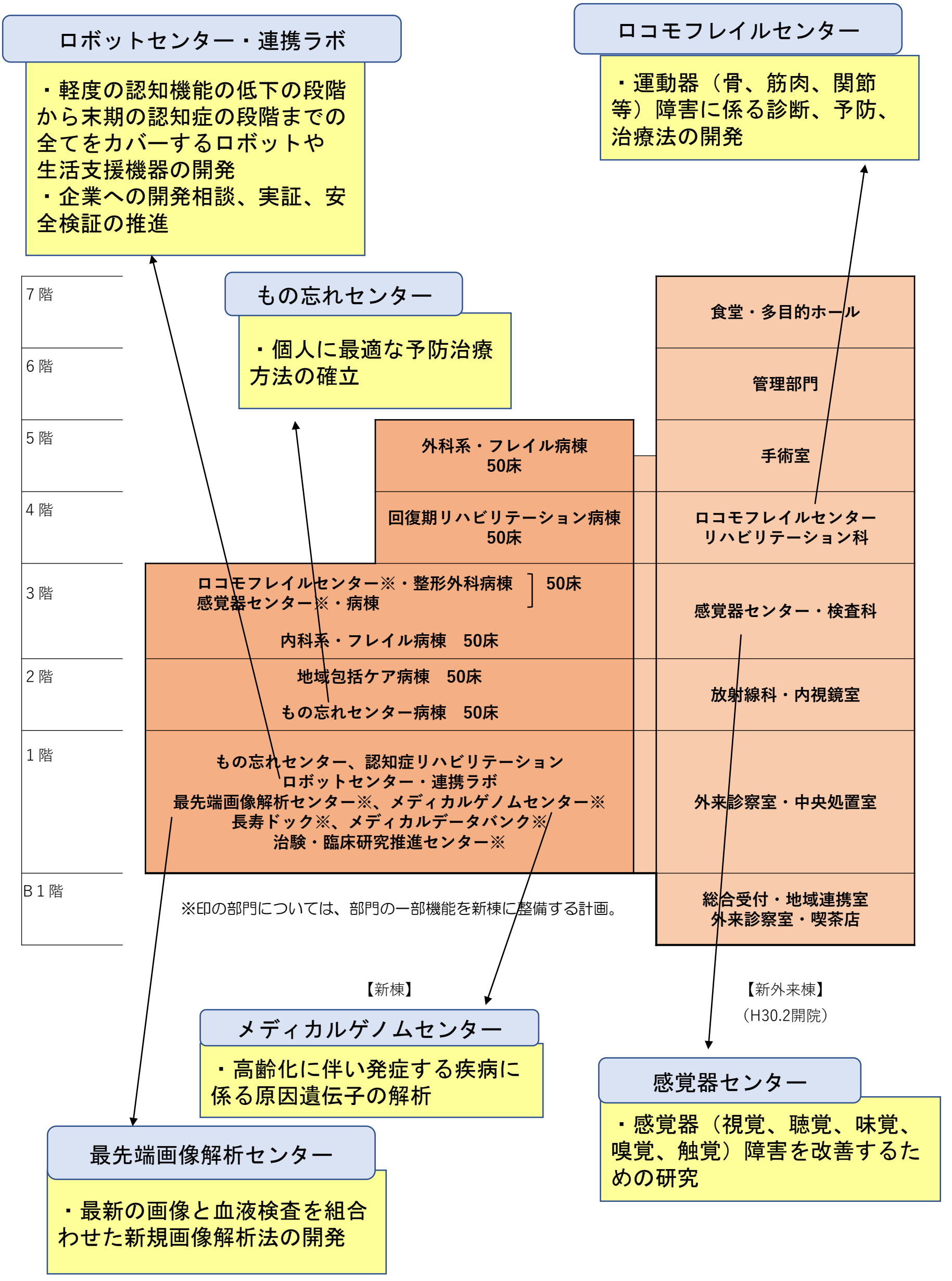
６　整備スケジュール



７　整備費用（概算）

約50億円（設計費：0.8億円、建設工事費：45.6億円、解体工事費3.6億円）

８　イメージパース



９　オレンジホスピタルの概要